

シンラの旅-18 「和歌山」 熊楠の森をめぐる冒険



エッセイ
芦原 伸



SINRA

CONTENTS

各見出しリンク

▶ **SINRA-1 2014.9**
「小豆島」 オリーブカントリー

▶ **SINRA-2 2014.11**
「秋田」 マタギの里へ

▶ **SINRA-3 2015.1**
「富岡」 富岡製糸場の歩き方

▶ **SINRA-4 2015.3**
「北海道」 北海道ワイン紀行

▶ **SINRA-5 2015.5**
「小笠原」 黒潮の孤島鶴来島漂流

▶ **SINRA-6 2015.7**
「大台ヶ原」 熊野古道をいく

▶ **SINRA-7 2015.9**
「信州木曾谷」 森林鉄道が消えた日

▶ **SINRA-8 2015.11**
「霊峰月山」 死と再生の小宇宙

▶ **SINRA-9 2016.1**
「丹後」 古代王国と、絹をめぐる道

▶ **SINRA-10 2015.3**
「秩父」 絶滅危惧種再生へ、開ける道

▶ **SINRA-11 2016.5**
「佐賀」 大海を越えた胡蝶の夢

▶ **SINRA-12 2016.7**
「津軽」 ブラキストン幻の海

▶ **SINRA-13 2016.9**
「五島列島」 クジラたちの海

▶ **SINRA-14 2016.11**
「飯田」 天空の里、遠山郷

▶ **SINRA-15 2017.1**
「北海道」 ジンギスカンをめぐる冒険

▶ **SINRA-16 2017.3**
「宮城県」 猫たちの聖地

▶ **SINRA-17 2017.5**
「京都」 神が授けた、いのちの水

▶ **SINRA-18 2017.7**
「熊楠」 の森をめぐる冒険

▶ **SINRA-19 2017.9**
「カナダ」 極北の大地に生命が燃える

▶ **SINRA-20 2017.11**
「宮崎」 神楽仮面の謎を探る

ご購入

 Fujisan.co.jp
雑誌がオンラインで買える

ご購入

 amazon.co.jp
プライム

和歌山県・紀伊田辺



熊楠の 森をめぐる 冒険

和歌山県が生んだ博物学の巨星、南方熊楠。

植物学・菌類学者であり、日本の民俗学の創始者の一人だ。19歳から14年間アメリカ、イギリスなどを海外遊学し、十数カ国語を自由に使いこなした。国内外には多くの論文を発表している。日本に「ミナカタ」ありと世界の学者を振り向かせ、生涯在野の学者に徹した。いわば先駆的エコロジストでもあった熊楠は、紀伊半島の森に何を見つけ、何を守ろうとしたのか。動植物から人間、宇宙にいたる、森羅万象を探究し続けた巨大な、熊楠の生涯に迫る。

文●芦原 伸(ノンフィクション作家)
撮影／戸川 覚 協力／和歌山県観光連盟

森には草や木、虫や鳥など多くの生きものがある。さらに土の中には見えない生き物がたくさんいる。熊楠はこうした自然の生態系を生涯に渡り研究し続けた

再生する力をもらった

——雨にけふる神島を見て 紀伊の国の 生みし南方熊楠を思ふ

1962(昭和37)年5月、南紀(和歌山県南部)の白浜町を行幸した昭和天皇は熊楠を偲び、歌を詠んだ。

この時、熊楠はすでに他界していたが、その33年前、昭和天皇は湾内の神島を訪れた時の思い出を忘れなかった。よほど熊楠との出会いの印象が深かったのだろう。天皇が無位無冠の一学者の名を歌のなかに詠み込むことは極めて珍しい。

幕末の1867(慶応3)年に生まれた熊楠は今年、生誕150年の節目を迎えた。

和歌山県が生んだ世界一流の博物学・植物学・民俗学者であり、一方、裸同然の姿で暮らし、大酒飲み、加えて奇行、蛮行も伝えられる熊楠とは一体どんな人物だったのだろうか——今回はそんな思いを秘めて、南紀・和歌山に向かった。

羽田から1時間足らずで小雨降る南紀白浜空港に着いた。

4月上旬のこと、満開の桜が雨の車道を埋めて、しっとりとした情緒を奏でる。どこともなく空気が優しい。レンタカーを借りて、海南市をめざした。

海南市には熊楠ゆかりの藤白神社がある。最初にここを訪ねたことには

熊楠は粘菌を求めて、熊野の森を駆け巡った



1891年、アメリカ留学中の熊楠の写真(世界一統蔵)

訳があった。藤白神社は熊野古道一の鳥居で、藤代王子とも呼ばれ、熊野三山の五躰王子の一つとして知られる。都からは熊野詣での出発点に位置しており、熊楠と熊野のかかわりの第一歩として重要な意味をもっているからだ。

熊楠という、いかにも豪胆で、猛々しいペンネームのような名は、実はこの神社に由来している。

藤白神社は近畿自動車道紀勢本線の海南インターの近く、街中にありながら、和歌の浦を望む高台にあり、森閑とした境内には、巨木が深い影を落としていた。

迎えてくれた権禰宜の中井万里子さん(57歳)は、

「熊楠さんは子供の頃病弱だったそうです。そこでお父さんに連れられ、使用人に負ぶってもらい、度々この神社へお参りにきなはったときいています」

実際、熊楠は4歳の時、脾胃(胃腸)慢性消化器障害)を患い、生死をさまよっていた。

境内には子守楠という神木があった。

樹齢1000年という楠の巨木で、樹高15メートル、根回り8メートルを越え、天をも覆う勢いである。

この神木に触って祈ると「元氣な子に育つ」という言い伝えがある。

楠は照葉樹林の代表格で西日本の沿岸部に多く育ち、大木となることで知られる。日本全国の巨樹ベスト10のうち、8本は楠だ。幹や葉からとれる樟脳は芳香を放ち、強心剤、鎮痛剤、防虫剤にも使われる。

南方家はこの社の氏子であり、熊楠の名は、神社ゆかりの「楠」(神木)、「熊」(熊野)、「藤」(藤白)の三文字から父親の弥兵衛が「熊」と「楠」の二文字を取った。

「昔は付近でも熊吉とか、藤子など神社から名をいただいた子どもが多かったようです。でも二文字をいただいた方は聞きません。よほど期待されていたんでしょうね」

ちなみに兄の名は藤吉、弟は常楠、姉はくま、妹は藤枝、末弟は楠次郎と兄弟にはすべて三文字からその名がとられている。

「熊楠さんの名がこのあたりで知られるようになったのは熊野古道が2004(平成16)年に世界遺産登録された頃からですかね。そんなに昔からではないです」

和歌山の巨人、世界の植物学者として知られる熊楠だが、案外地元では知られた存在ではなかったようだ。

その後、旧制和歌山中学を卒業して、上京し、東大予備門で落第した



熊楠が生態系の研究のため歩き回った熊野の森(田辺市野中)

熊楠は落胆して故郷に帰る。その時もこの神社を訪問して、楠の巨木に触れ、「再生する力をもらった」と日記に書いている。

熊楠はシテイボーイだった

海南市から南下して白浜町に入った。3月にリニューアルオープンしたばかりの「南方熊楠記念館」は田辺湾の先端、番所山公園にあった。白浜海岸や田辺の街並み、紀伊の山々などぐるりと360度の風景を見渡せる景勝地だ。番所の名は藩政時代に見張りの役人が常駐していたことになんている。

ウバメガシ、ゴモジユ、ゲットウ、アジサイなど海洋植物が茂る道を通ると、正面入口にはやはり昭和天皇の「雨にけふる」の歌碑が鎮座していた。

新しい白垂の建物には熊楠の遺品が約750点展示されている。「本草綱目」や「大和本草」、「和漢三才図絵」など彼が生涯親しんできた古典の直筆の模写を見ると、細かな文字と軽妙な挿絵に驚いてしまう。図書館にコピーなどなかった時代、一字一句懸命に書き写すしか術はない。

現代では、狂気の沙汰である。凡人には想像が及ばないが、その涙ぐましい行為と情熱には脱帽するばかりだ。「生涯」を紹介するコーナーには東大予備門での成績表の展示があった。それを見ると113人中の59番



右／かつて熊楠が使用した研究
写生用具セット 左／菌学の
父と言われるイギリスのパー
クリーとアメリカのカーティスを目
指して菌類の収集を始めたアメ
リカ留学時代の熊楠の菌類標
本(2点とも南方熊楠記念館蔵)



キューバ採集旅行の前後の下
宿先で撮影した写真。左が熊
楠、右が江聖聡(こうせいそう)。
江聖聡はジャクソンヴィル在住
の中国人の食料品店主人で、
アメリカ留学時代の恩人。とき
どき熊楠も店番をしたという(南
方熊楠記念館蔵)

熊楠を世界的な学者にしたのは「変形菌(粘菌)」である。記念館には実物の変形菌を顕微鏡で見られるコーナーがあった。「こんなものなのか!」——覗いてみて驚いた。

変形菌とはアメーバ状の栄養体と胞子をつくる子実体の両方をもつ原生動物の一群で、いわば動物と植物の合の子のようなものだ。一見するとカビのようだが、顕微鏡でのぞくと、アメーバのような細胞が蠢いている。

熊楠はこの変形菌を求めて、熊野の森を駆け巡った。森の中で寝泊まりし、星々を仰ぎながら、この小さな生物を命がけて捜した。テントやシュラフなどない時代、山にこもり、1週間野宿したこともある。一般の人から見れば、奇人、変人と思われるでも不思議ではない。

植物学に造詣の深かった昭和天皇は熊楠から変形菌の話聞いて、関心を寄せたに違いあるまい。神島へ上陸されたのも熊楠の勧めだったという。

——「枝もころして吹け沖つ風
わが天皇のめましし森ぞ」

神島には熊楠の気概とも思える大きな歌碑が建っている。
案内をいただいた館長の谷脇幹雄



南方熊楠顕彰館に隣接する「旧南方熊楠邸」(登録有形文化財)

さん(65歳)は、「熊楠の頃の和歌山市は全国で8番目の大都市でした。父親は金物商で裕福だった。本人は南方家は和歌山で2番目の金持ちだった」と書いておられるが、私が調べたところでは7番目でした。とにかく富豪の坊ちゃん、今でいえばシテイボーイの元祖ですね。だから自然に興味をもったんです。田舎では自然は見慣れた風景だから、誰も興味をもちませぬ」

和歌山大学で熊楠講座を担当したという氏の解説は新鮮だった。

「そうかシテイボーイだったのか?」熊楠の評伝や写真を見ると、だらりと浴衣を羽織っており、垢まみれ、髭づらで、とても良家のお坊ちゃんとは思えない。酒を飲んで暴れたり、怒鳴り散らしたりする癖のあることなど、地方の品のない変わり者に思えてしまう。ところが生粋の町っ子だったのだ。

熊楠は生涯定職に就かなかった。これも今でいうフリーターの元祖である。19歳で日本を出て、以来アメリカ、キューバ、イギリスと渡り、14年間世界をさまよう。この間も自分で稼いだことはなく、すべて実家からの仕送りであった。世界放浪は今でいうバックパッカーの旅に近い。シテイボーイ、フリーター、バックパッカーの元祖となると、博覧強記で超人的な研究者というイメージとはほど遠く、なんだか流行好きな昔

熊楠の頃の和歌山市は
全国で8番目の
大都市だった



木に付着した変形菌(粘菌)の「ケケホリ」

和歌山

旅館あづまや

日本最古の湯の峰温泉

開湯1800年、日本最古の湯として愛される湯の峰温泉街に建つ老舗温泉旅館。お風呂は木の香り漂う横風呂で、湧き出したばかりの新鮮な自家源泉が楽しめる。日本に数軒しかない、高温度の湧出をそのまま利用した、むしろもあり、ミストを直接吸い込むと、のどの痛みを和らげる効果も。料理の水はすべて温泉を使用。お湯の効能を全身で体感できる。貸切の家族風呂も用意。木造4階建ての風情ある建物でゆったりくつろごう。

吹き抜け天上の太い梁が重厚な浴場



旅館の料理には温泉を使用



■ 田辺市本宮町湯峯122
 ■ 0735-42-0012
 ■ 16,350円～(1泊2食付き、大人2名利用時の1名の料金)



名湯のつば湯を望む湯の峰温泉街

とっとり

田辺の魚料理を堪能

JR紀伊田辺駅近くに2000軒以上の飲食店が並ぶ飲食街「味光路」に軒を連ねる居酒屋。魚を中心とした地元の新鮮な食材を使用。刺身の盛り合わせや出し巻き卵は絶品。なかでもおすすめは、もちカツオのタタキ、とろろカツオ。食感がおいしい、きびなご天ぷら。量が多く価格もリーズナブルなので安心して楽しめる。地元民に愛され、いつもにぎやかで活気のある店だ。平日でも満席になることがあるため予約してかえり行くのがおすすめ。



「とっとり」の店主

■ 田辺市湊11-23 ■ 0739-24-7952 ■ 17:30～22:30 ■ 日曜日、祝日



左/赤ちようちんが目印の「とっとり」 右/刺し身の盛り合わせ



左/色とりどりのくまぐすあんぱん 右/黒毛和牛すね肉ときのこのラグーソースのラザニア。パスタは季節ごとに替わる



ララ・ロカレ

熊楠の愛したあんぱんを再現

ララ・ロカレは自家製の天然酵母パンとパスタが味わえるカフェ・レストラン。店の人気商品は南方熊楠のかわいいイラストが描かれた「くまぐすあんぱん」。熊楠はあんぱんが大好きで、徹夜で研究する時の夜食に食べたり、初恋の相手にあんぱんをプレゼントしたりしたという。そんなあんぱんを現代風にアレンジして再現。こし餡、栗餡、芋餡など定番の味に加え、ヨーラ・カフェ、酒種、紀州梅餡など全6種。人気商品ですぐに売り切れるので、買う時はお早めに。



■ 田辺市上屋敷2-6-7 ■ 0739-34-2146
 ■ 9:00～18:00
 ■ 火曜日
 ■ くまぐすあんぱん / 150円(税別)

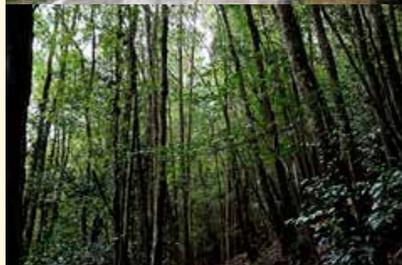
昭和期に建てられた田辺警察署をリノベーションしたおしゃれな内観

継桜王子

粘菌の宝庫だった

継桜王子は熊野九十九王子社のひとつで、名勝「南方曼陀羅の風景地」の一部として登録されている。社を囲む鎮守の森の巨木群は樹齢800年以上とも言われ、直径が2〜3メートルを超えるものが何本も立っている。これらは日照、地形の関係で南東方向の那智山の方角にのみ枝を伸ばしていることから「一方杉」とも呼ばれる。熊楠はこの熊野の森の中で変形菌や数多くの植物の採集を行い、貴重な自然を後世に遺した。

継桜王子への入り口。石段の両側には杉の巨木が9本立つ



左上/中辺路野中の熊野古道。猿が通りを行き来する姿も珍しくない 左下/野中の森の様子

